

令和4年度 府中町立府中南小学校 学校自己評価表

学校教育目標	自分が学ぶ みんなと学ぶ かしこく やさしく たくましく	経営理念 ミッション・ ビジョン	「共育」子ども大人も共に育つ学校・家庭・地域 1 共に学ぶ子ども…自ら学ぶ子・自他を認める子・根気強くチャレンジする子 2 共に育つ教職員…子どもと共に自ら育つ教職員・出会いを大切にする教職員 3 地域と共に育つ学校…自分が好き 友達が好き(児童) 子どもと共に学び合おう(保護者) 学校と共に子どもを育てよう(地域)
--------	---------------------------------	------------------------	---

ビジョン(中期経営目標)実現に向けての現状(進捗状況)と今年度の位置付け	不登校等による児童の姿から生徒指導体制の整備を図るとともに、学校とは「学びを通して人をつなぎ共に育つ場である」ことを家庭・地域と再確認しつつ、「命の教育」で教育活動に筋を通す。
--------------------------------------	--

評価計画(中期経営目標を設定して1年目)

A 中期(3年間)経営目標	B 短期(今年度)経営目標	C 目標達成のための方策	D 評価指標	目標値(%)	E 評価結果			
					(10)月		(2)月	
					達成値(達成率)	評価	達成値(達成率)	評価
a 命の教育の充実	・自ら課題を見つけ、解決しようとする児童の育成	・児童の気づきや思いを大切に命の教育ストーリーの立案 ・自己内対話を取り入れた主体的な学習の充実 ・主体的な学習を促すためのルーブリックを意識した評言	主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組む教師の割合	80%以上	91.3(114)	A		
			他者の意見や考えを受けとめ、自分の考えを表現できる児童の割合	80%以上	96.2(120)	A		
b 読書活動の推進	・自分から本を選び読書しようとする児童の育成	・読書祭りなど、委員会活動を中心とした、本や図書室にさらに親しむ活動の設定 ・読書活動を取り入れた単元づくりに関連した並行読書の推進 ・「読書名人」への意欲向上を図るための「リプロカード」の利用	自分から進んで読書ができる「読書名人」の割合	80%以上	85.4(107)	A		
c 生徒指導体制の確立	・教職員による統一した指導(当たり前の文化) ・お互いの違いを認め合う児童の育成	・SSTの実施(年4回) ・同年齢や異年齢集団による協調的な関わりの場の設定(各学期1回程度以上)	「同年齢や異年齢集団と関わることが楽しい」と答えた児童の割合	80%以上 (上:同年齢 下:異年齢)	96.4(120)	A		
					90.0(112)	A		
d 体づくり	・運動能力の向上 ・食育の充実	・児童の実態に基づいた瞬発力向上の取組 ・「食べることの大切さ」を理解する授業の実施(年2回)	立ち幅跳び記録1~4年110%UP、5・6年105%UPの児童の割合	50%以上	—	—		
			「食べることは大切」と感じる児童	82%以上	98.0(120)	A		
e 信頼される学校づくり (コミュニティ・スクール)	・「共育」活動の充実	・地域と教職員の協働した取組の推進(委員会活動とのコラボレーション) ・会議の効率的な運営(業務のスクラップ&ビルド)	教育活動の満足度(児童・保護者)	85%以上 (上:児童 下:保護者)	88.3(104) 95.7(113)	A A		
			子どもと向き合う時間の確保(教職員)	85%以上	84.2(99)	A		

評価基準…A:目標達成(95%~100%) B:おおむね達成(80%~94%) C:もう少し(60%~79%) D:できていない(59%以下)
目標値を100%として、達成率を計算する。「例 目標値85%→アンケート結果92% →目標値を超えているので評価はA」

F 結果の分析・解釈(中間10月) ○…成果 △…課題 ★…下半期の改善方策

<p><a 命の教育の充実> ○「主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答は91.3%であり、教職員は全体的に評言に対する高い意識を持つことができている。 △「主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答の多くは「どちらかといえばそう思う」が約7割を占めており、自信をもって取り組んでいるというためには、意識をより高めることが求められる。 ○低学年では生活科・道徳科・給食指導の成果が出ており、ほとんどの児童から肯定的な評価を得ることができた。中学年、高学年においても、おおむね肯定的な回答が得られているのは、日々の学習が命の教育につながっているからと考えられる。 △低学年でのアンケートでの聞き取りは「感じる」ことができたかどうかを問うものであり、「感じる」という言葉の概念を子どもたちがどう捉えているかという点について疑問が残る。 △中学年の命の教育における1学期までの学びが、児童の回答にどう影響しているのかは推し量ることができない。 △高学年に関しては、アンケートでの質問事項の「言葉や行動に表すことができた」という問いに対して、現段階では課題設定の段階であるため、アンケートの中での「まあまああてはまる」という回答が多くなっているものと考えられる。 ★教職員の「評言」に対するアンケート結果をふまえ、2学期から本格的に取り組む「命の教育」において、ストーリーの中で設定した評言の場をより意識した言葉がけをし、教職員間で定期的にCheck・Actionを行っていくことが望まれる。 また、児童の肯定的な回答は、全体的には96.2%と非常に高い結果が得られている。しかし、よくあてはまるという児童は64.4%にとどまり、自分の考えを表現できる児童が十分に育っているとは言えない。今後は児童の学習記録の記述から、学習活動を見直し、「言葉や行動に表すことができたか」という問いに対して「よくあてはまる」という項目を選択できる児童が増えるよう、児童が表現したくなる場の設定を工夫していきたい。</p>	<p><b 読書活動の推進> ○休憩時間や隙間の時間に読書に取り組んだ。 ○リプロカードでの表彰は、児童の読書のモチベーションにつながっている。 △同じ本を繰り返し読み、読書の幅が広がらない児童もいる。 △リプロカードへの記入をしない児童も少なくなっている。 △冊数カウント数は多いが、本の内容を味わうところまではいかない児童もいる。 ★第2図書室や町立図書館(検索システムも含む)を活用する。 ★読み聞かせや本の紹介などの取組を進め、環境づくりをする。 ★リプロカードの記入や読書の振り返りの時間を取り、読書の良さについて話していく。 ★期間・作者・種類などを限定しての学習を仕組んだり、委員会の「読書祭り」を利用したりする。 ★学習者用パソコンで電子書籍を読む試みを進めていく。</p>	<p><c 生徒指導体制の確立> ○不登校児童も縦割り班遊びに参加するために登校するなど、3年間工夫しながら継続して取り組んできた縦割り班遊びを肯定的に捉えて楽しみにしている児童が増えた。 ○5・6年生児童は1・2年生と一緒に掃除をすることで伝え方を工夫したり協調的な関わり方を考えたりするなど、高学年としての意識を高めることができた。 ○縦割り班遊びや折り鶴キャンペーンを通して、誰に対しても進んで関わろうとしたり、相手に応じてより良く関わろうとしたりする児童の姿が多く見られた。 △3・4年生児童はそれぞれの学年で掃除をしているため異学年交流が少ない。日常的な交流ができると良い。 △近接学年での交流が実施できている学年に差がある。 △行事の中でももう少し異学年で交流できると良い。 ★縦割り班活動の内容を充実させると同時に、思いを伝え合う場として振り返りを活かす。 ★6年生の委員会活動を中心として、さらに異学年での交流が深まるような活動を企画・検討中である。 ★縦割り班活動をきっかけとして他の学習や休憩時間などの交流にも繋げていけるようにする。 ★年間計画を見直して学習内容や行事等で交流する機会を意図的に仕組む。</p>	<p><d 体づくり> ①運動能力の向上 ○体育委員会が立ち幅跳びの記録の向上につながる運動やコツを紹介した動画を作成し全校児童が視聴し、体育の授業の準備運動に取り入れた。 ②食育の充実 ○栄養教諭と連携し、学級で食育の授業を行った。(1年・2年・3年・4年) ・食事のマナーを学習し、実際に給食で実践していた。 ・自分で豆をむくことで、豆が苦手な児童も食べていた。 ・おやつを食べ方を学び、目標を決め夏休みに実践する。 ・一口メモが効果的だった。 ★①立ち幅跳び ・体育委員会が、トッティキャンペーン企画の一つとして、体育館で分散して運動や記録会を実施することで、児童の意欲を上げていく。 ★②食育の充実 ・給食委員会で、食の大切を伝える動画を作成する。 ・一口メモで、苦手な食材を中心に、なぜ必要かなどその食材の有用性を伝える。</p>	<p><e 信頼される学校づくり> ○学習支援や環境整備、委員会・クラブ活動など、地域の方(サポーター)と協力して活動に取り組み、児童・教職員と地域が近い関係性を築くことができている。 △連携が一部の教職員やサポーターにとどまっているので、コミュニティ・スクールの取組紹介や学習支援の依頼、教職員によるサポーター活動への協力等、双方向のつながりを広げていくことが今後の課題となる。 ○5月には「働き方改革」についての研修を行い、その意義と目的、今年度の本校での取組(業務改善ボード、スイスイ水曜日)について全職員で共有した。職員室で退勤時刻についての話題が出てきており、意識が向上しつつある。 ○コロナ感染対策と業務改善により集まる機会を減らすため、内容に合わせて全体での研修と学年部ごとの研修に振り分けた。校務支援システムやGoogle Classroomを活用し、資料配布やアンケート集計時間等が縮小した。研修は、夏季休業を利用して行い、授業日の「児童と向き合う時間」を確保した。 △会議時間の短縮 ★コミュニティ・スクールについて、児童や保護者に周知する。 ★学校だけでなく、現在連携している活動を紹介して保護者や地域、サポーターの方々と共有し、児童とサポーターが一緒に取り組むアイデアを実践していく。 ★Google Classroomをさらに活用し、授業づくりや分掌の仕事に役立て、効率化を図る(Classroomでの教材共有。授業の中でワークシートや作品を撮影・提出させ、評価に役立てる。等) ★スクラップできない行事と、縮小・削減できる行事を整理する。 ★会議は、協議するポイントを絞って提案できるよう下準備する。</p>
--	---	--	--	--



